

平成27年12月16日(水)

老球の細道 188

勝ちに不思議の勝ちあり 負けに不思議の負けなし

会津バスケットボール協会 室井 富仁

県ミニバスケットボール優勝大会が先日会津で開催された。残念ながら地元会津のチームは全チーム1回戦敗退という結果に終わってしまった。接戦での負けが多かったので、それほど悲観する必要はないが、負けた原因を冷静に分析して次の大会に備えてほしい。

題字は元プロ野球の名監督野村克也氏の言葉として有名であるが、もともとは松浦静山の剣術書『剣談』からの引用である。「負けるときには、何の理由もなく負けるわけではなく、その試合中に何か負ける要素がある。勝ったときでも、何か負けに繋がる要素があった場合がある」という意味。試合に勝つためには、どうしたら負ける要素を消せるかを考える。また、もし勝ち試合であっても次はわからない。安心してはいけない。

今まで「ラッキー！」と思われるような勝利をたくさん経験した。例えば、現役選手の頃に1点差で負けていたゲーム終了時に、3Pラインの距離からリングを直接狙ってシュートを打ったのにバックボードに当たって入ったことがある。結果的に1点差で逆転勝ちをしたが、まさにラッキー、不思議の勝ちだった。

しかし、負けたときは運のせいにはできない。個人のせいやメンタルのせいにしてもいけない。メンタルというのは実態がよくわからないことが多い。人間性を否定することにもなりうるのでコーチは注意をしなければならない。コーチは指導していたことで何が不足していたのか、何が接戦の負けにつながったのかを謙虚に反省しなければならない。

ゲームにおいて一桁差で負ける原因は色々あるが、私は3つにとらえている。一つは、フリースロー。ゲーム終了後、スコアブックを確認して落としたりしたフリースローが結構あることに気づくだろう。フリースローをおろそかにするものは1点差になく、ディフェンスもない最も基本的で最も簡単なシュートが1点差の大接戦の主演を演じる。

二つ目は、ターンオーバーである。特に凡ミスと言われるトラベリングやパスミスなどである。接戦は1本の凡ミスでゲームの流れが急転回して、勝てるゲームを落とす。

三つ目は、イージーシュートミス。ノーマークのレイアップを落とす、ノーマークのゴール下シュートを落とす。ターンオーバーと同じでゲームの流れを変えるだけでなく、自チームにストレスを加え、相手チームに勢いを与えてしまう。

接戦で負けるときはこの3つが主演を演じる。この3つを大事な場面で表現するプレーヤーは日頃の練習においてもやっている。「練習だから平気さ」。日頃の練習においてこのような習慣を無意識のうちに自ら作っている。試合が接戦になる、そこにプレッシャーが加わる、いざという時に日常が顔を出す。当然日常の練習の姿が正直にあらわれる。

バスケットボールは習慣のゲーム。簡単なことをおろそかにすれば、その簡単なことで復讐を受ける。負けることは不思議でも本番に弱いわけでもない。ふだんの練習で負けるための準備をしていたにすぎない。

追記。今大会、原町ミニバスケットボール男子チームが相双地区初の全国大会出場を勝ち得た。震災と原発事故の影響で選手が減少する中でも我慢強くチームを育て上げた結果である。この快挙に心から祝福を捧げたい。